

## 戦友録⑫ 反交友録

### 最高年齢の本会メンバーでは？

——意見広告に参加する満100歳の母——

吉川 勇一

■この「反戦交友録」は、これまで逝去された方ばかり扱ってきました。そう決めていたつもりではなかったのですが、こう続けますと、生きている方を書きにくくなっていきます。ですが今回は存命する人を取り上げます。

■母、吉川寿々江はおそらく、最高の年齢の本会会員ではなからうかと思っています。ついこの1月18日で、満100歳になります。13日には、暮している老人ホームで誕生日祝いのパーティが行なわれ、私も含め子どもや曾孫たちも参加しました。足腰は弱くなり、歩行器がないと歩けません、まだ頭は元気でおります。毎年、憲法記念日の意見広告には参加してきました。



■母がデモに参加した最後は、1999年4月4日の「新ガイドライン関連法案反対の集会」で、東京・渋谷の宮下公園の集

会は天候にも恵まれ、桜の下のデモでした。市民の意見30の会・東京からの参加者はかなり多く、20名近いメンバーが参加していたようです。当時は同居していた私の妹も付き添って、親子3人の参加でした。この時の母は87歳でしたから、今の私よりも、まだ5年も上だったわけです。（写真はその時の私と母）

■先日の選挙の際、母からは、「すぐに100歳にはなるんだけれど、こんな国には長く生きていたいとは思えないね」と言われてしまいました。選挙の結果の悪い予測はしていましたが、しかしこれほどのひどさには、正直、落胆したと、私も今年の賀状に書いています。小選挙区制度のせいだとか、自民党自体の獲得票数は減少しているなどと言われても、「明文改憲」派が衆院議席の3分の2以上を獲得し、右翼国家への進行が進む結果を、選挙民が求めたことも事実なので、私から。私の知人からの賀状にも、この趣旨の表現が多数含まれていました。

■しかし、私の賀状には、つづいて「77歳に出した拙著のタイトル、『民衆を信ぜず、民衆を信じる』（第三書館刊）ということを再確認しています」とも書きました。母にも、日本の政治に怒ったからといって、すぐあの世

に移っても面白くないよ、自分の生き方は誰がなんと言おうと、絶対変えないからね、と思っているんだね、と伝えました。

■この拙著のタイトルになったのは、本誌の103号（2006年8月号）に載せた文でした。本誌にあてた、「ただいま82歳。疲れました。展望も開けないのに、仲間うちだけで声を大きくしても空しいのです。好戦派の元気のいいのと戦う力をください」という秋田県のT・Yさんの手紙、そして「東京都知事選挙の結果に、皆さんも将来の不安を感じられたのではないのでしょうか。本物がわからないと偽者を本物にしてしまう。本物がわからない力は、どのように育つのでしょうか」という兵庫県のM・Hさんからの手紙に、私が出した返事の手紙だったので。7年前のこの2通の手紙にあることが、今、まったくそのまま通るような状況です。とすれば、この私の返事も、まったく今、差し上げたい文章だと思えます。7年前の本誌のこの文にもう一度目を通して頂けませんか。

■母は、歴史のことが好きで、ずいぶん本も読んできましたが、義務教育の高等小学校の卒業だけでした。政治への関心も最初は持っていなかったのですが、60年安保問題の頃から、徐々に私の意見に賛同するようになってきたのでした。「今年の意見広告にも入ってくれますよね」と母に頼みましたが、「入るさ」と言われました。

（よしかわ・ゆういち／本会共同代表）